椿説弓張

三

へ13
3095
4

へ 13
3095
4

夢之巻

昭和九年
七月二三日
購求

夢之巻の三

源氏物語

薄雪姫い墨染みく。

曲亭馬琴つくれ

怪しき風ふあるわしも。園部右衛つ伝の毛ふうく。

怎うさまと得。且頼朝の父兵衛尉のふうと志と感激しく。容ふ妹咨の

縁みく孤縁といくども。元来嬉きてるの幼くまうと思ふあらむ。こい観世音の

導きをみく。うかくこの人の扶助と得ば父の往方とも。まうの兄ともせ出を

べうもがも。誠心の一とぐふ起まるこ。まうふ右衛つ伝頼朝の父の病苦と

告来るとのく。墨染うう直ふ丹波ふ馳うくく後ふくこんく信も

ううしべいとるがううとふ。ある夜孤燈ふ對しくゆくこ来し

うこのうとど。ひうがしうこも怪しのうこ燈の下ふ来者人のう。

五重衣　俗ふつう十二ひとへ又五衣

指　鉄名鉄ふ　由地俗不ふ　於与地　小野城

蓬衛天竺ふ　菜不死の薬と　西王母ふ沢ふう　蟬城蓬く　月中ふ走る　貝鈿

俗ふり龍宮

仁明天皇　人皇五十四代　諱の正良始　ハ日本根子　天金脳意皇

小野小町　俗前ふうえ　ふう武ハいふ

小野ハ相坂　ふく死と一部　ふ寺ふのふ　於く死と年　九ふ家鮮

誰ととうんまぶ五ツ重衣ふ緋袴しうか上簡の容姿比なきごとうくと人々く花ふ　あり笑ぬ譬ばその貌閨こうこう一朶の花のごく。嫩こうこう一枝の柳ふ似ふう。

眉ハうとてく春の山と画き。眼ハ横ア〻く秋の水と澄し。繊ゆ〻ふ長き手の指ハ。くじゃく土と出る筍ふも勝て。小ゆふ圓る唇ハ将ふ開んとする梅ふと疑ふ。しし内宮の蟬城ふあらぶ。ハ定く貝鈿の龍女うるびし。薄雪ハ天と貌とうちうちうち

燈下に怪を見て
薄雪ぐめく
小町の
後身
なる
浅
芳里

杜鵑枝上月之更

因果の道理ふしぎ。脱さんとすれども脱さるべきこと。小野氏の家ふ生るゝ。
と。前生ふ小野良實が女児なりしゆへ。又虚子と名づけらるゝ。薄雪と名づけ
ゆゑ。前世ふ虚言をなす。影の男と迷ひ苦しむ。且雪中ふ深く草ふ伏
て死なんとする故ふ。虚と雪とをなすゝ。名ふ名づけしのこゝろと。薄雪の薄の
字いとなるなり。薄命の薄と象をなす。又深く草ふ伏と苦しむる恩報なり。
今生ふ父ふ伏て父ふ伏の艱苦と禀父の往方とをなん
なり。ふかきの草ふ伏と妹婢の縁ふ〳〵孤縁ふ既ふ
なるふ深く草ふ伏の後身なるべし。園部右衛門佐と妹婢の縁ふ〳〵孤縁ふ既ふ
彼人の為ふ百年の身をなすべしといへども千辛萬苦して節操を盡し。
影の年月を経れば會ずして。是百夜と約して車の撮ふなるべし。
報なり。さるあひだ。兄実雄とともに苦
をむるあひだ。過世ふ成身と懸想して。一生を悔る人なり。彼実雄の生

ゝ虚の字を得。成身が生るゝ虚ふ實の字を得る。前生の虚言。今生
なる實言なり。復もなき。石可思議の縁故と引つきれば虚と得る是れ
實なり。各づけられども成身が為ふ虚言なるなり。實と得る。
虚なり。なるとなれども是の為ふ實言と竭なるべし。久後なるべし。
又實雄の身なるなれば滋江前の物妬なるべし。氣質と禀なるべし。
實は秋光朝臣も。滋江前も。玉の方も。又この一圏子ふ。
前世の因縁なり。父母なり。兄弟なり。夫婦なり。君臣なり。恩人
なり。讐敵なり。この罪障なり。やゝ滅なるべし。親子兄弟夫婦。
なるふ聚なり。家もなり。弟なり。この三代とまらんとなるべ。
三曲亀と失なり。戈となるこの年と候なり。元是大慈大悲の冥助なり。
過世の罪障滅消して。来世ふ清化と得んなり。願なり。悲なり。

前身
前の世の身のこと

後身
生まれかはりの身

天狗
鞍馬の山に住む天狗

うち前身なるぞ。後身に告げて一面の鏡に對ひたまひ鏡の中にも又其身あるが
ごとく。ありて即ち身うちの身に即ちうちうちうちこれ其ありてこと示告自問自答。
又いとう疑んとく。ありて審に說示もとゞ忽然として鏡に入るごとく只唐橋
の薫ぐとく。雲間と過る杜鵑の声のこゑ聞く歩えて。薄雪ひとの示現と
ゆくこゝろ驚き。夢うとうりゝび寢もやらぬ。現うとうりゝ其人とうんぬ。
まどし醉うが如くあく。忙然としてゆ迷しぞ。いつぞ身過世ありく。
罪障いとぎ滅ぼど。身い浮萍の根とうとうとくうぐらうるも味氣うるくを
ぐうの艱苦と稟いうる人の恥辱ふあるとおがせいで悲歎ふ忍
あるべど一声阿呀と叫まひ絶ぶ次の間ふ移る。告垣驚き見て走あり。
薄雪姫の面色生平うちの怪怪とく。その故と問ふ。薄雪い天機を漏さん
とうとうとく。うが身小町の後身うとうとうとの顚末とび告うぞうとど。

いつる日のことぶふ彼ふまうせどい遂ふいづ誠ぶのかはしうゆくいうこあばし
墨染ふくく園部頼渝と縁あり締うる情由と推ぐうさく言ふうう芝とうさ
母上ふも少えもうぎうしい彼君うう媒りくいうせふと行ううえまうまども
父の病いと危うとうくく彼如う直ふ丹波まうまうくく後ぶ久く音耗
も絶ぶり父の喪うぐふ籠て居まうんあ姫ふうの蠶ぐうあうぐ。うが身
とのぐうい。ほとやうん仏待あるうもうぶふこのうというぐしく身うぐ広うぶ
後の世もいとい苦しううん汝いうぐ隔ううりのうまぐ密ふ少えあく
母上ふもふいりあうべし。是彼ぶひ屈しうる故あう厭鬼まうく声と聲
汝と驚ぶしふうう。物ぐうも長ううぬとくゆうくく嫉うと宮ぐが
の姫少うううく歎び。こいうう歎きすぶうとも見ぐぞ。頼信ぶ父子
信うしく生まるふ。縁あり締びまうんいうさ後眉沿すふうとで遠うぐぞ

信もあるべきかく愛さるるをとうべくとくみも苦塩みいきらせすべきり。
暮日墨染みく。彼君の馴しまげふこえてふといと不審うるうる果しくく
ぶりひ合せ行るうべ應う。うるさまぐふ鬢ふ間ふ鐘の音もちくゆえて
夜いとく深ぬ薄雪い冊の砂まふるとこ見ふ撒しまおらせんい
まぐ幼あらべ。早睡るべしくく邪房ふ入うまべまの塩いやくく夜食を被
うべしふ暇しく退出く

塩根 ぶう

ちまふ又薄雪姫の兄實隆いるるところ又の往方をきちんとく洛と旅ぐう。
まぐ。紀路る高野山うべとくく。松主ぶ中ふるる。摂津和泉を行ぐ彼
地ふ起さ。うふうふ契もうべうあるとりしと詠る白息の角ぶ。早うりぬ。
洛と出くいべいく日もあらねど。実雅い忽地旅路ふ倦因を幼の中密ふ

いうふうれ洛ふあくくる日い従界師い恵くくくく美酒珍膳ふ口腹
と養ひうるふ既ふ萬里の逆旅ふ起さくい一椀の村酒も口ふ入うぎ只
旦夕ふ松主ぶ博士ぶうる教訓。少も飽うう。生死ぶふ定うるし又の往方
紙索ふとく。何國ぶうゆくべき。彼を出く旅く。ふくいぶ月の
安穏とくくらんふうと寝思し。その夜の歌ふ松主ぶ熟睡うう紙
窺ひ。路銀とぶうるく懐ふきくいぶ地ううく逃亡う。松主い驚く後ふ雅
のうんぐう紙怪しくく。彼此とううふ邪処の下ふ秘きる路銀もうせ中の
為体ぶもくく砂とぶぐれがまぶ宿の主人を呼びくく。うううう。汝徳人弘
まうどやと問ぶ。主人答く。伴ひまひ若人い夜の明ぶふ起出く。我い
紙さう道といぐとく草鞋を逆さるふ穿ちくふ蹴ふうきう出さう
まくう。まうせまうとく。外ふい歌合せし旅人もあらぬど。物の失さらい彼人の

西嶌ゆやとりぶつらく縁故と考ふ通路実雅の景迹ふ石書しはももそく。
全く主人と疑ふべきまぐもうれんぐ。さくふ雅君。それと出抜く出去のつ。
かくこのからぬとふまぐしまんぐ。ゆも洛へゆうもぐ。とふ主君まぐら汚ほこさまぐまよ
うるとふふぐ只果まふ呆れく。再びいんぐうもまう。かくふ路銀さんるくうて。
遠くこの往方と索めぐまるともねじぐく。それいとくくとの通路へうう上らんふ。
いう面ぬ。進退くふ究てくく。まだにんくと又き眉根をうせやせまじ
いふ。ちらはじとちひ屈しくくふ越前国北の庄の郷士ふ石室初平六と
いつりふ。松主ゲ叔父うう。こまぐ女児と野蠻とゆく。松主しふ年も似
つくくしくまばいめう丈永三年の夏のころ。初平六ふくく鎌倉へふくく婚縁
のるとふ東まくく立くつくふ。この秋松主ふ主家の難ふうを洛ふ上う
久しく信ぐふちぐれど。まづ彼れふ起ふく。ふふ語ふいふくふ路銀沢ふぐ。

実雅九ふ環會まのらせうふ諫言しくくうふ大殿の往方と索ちる
ぐしこ既ふ公公定めし行ふ衣服と賣く路用ふ充くくうう引ふしくく
北陸道へぐ起くくるさくも実雅ふ松主と遣過くん嶌ふ直ふ洛へゆう
ぐ。泉州堺の浦ふ宿とりふいくづらふ日公送りしぶ。ぶくくうの悪徒
どもとふいくく旅人うくくうくく。いくく信ゆふ眠く相語ひ酒ふ伏し色ふ
誘ひくく。忽地路銀を出ひ果させう。實雅ふまぐしぐ行くぐくまよ
日と送うく。こうう楽くゆうひしくも既ふ路銀竭くふさしも親く
かうつる友も早晩疎くくうつうぐ。今ふいくふともまぐうくく。竊ふ
敷の宿と走出く。夜ふ木の下岩の陰ふ外せぐも。らぐぐせき豹脚数
ふいも寝らるまぐ。昼ふ火田の早瓜と盗食へぐも。ふくぐ餓と凌ぐまぐ
幸ぐく洛まぐくふ。ふくしふさとぶふ面目うくうん清水寺へふゆらぐ

賓雅婿て
娶の旅宿
悪友の誘
酒の為ル
路縁を

しく師門が草庵に到りぬ。元来彼人とは面識なく、しかるに師門微笑して、そのゆゑ尋ねしに、秋光疎ふ
く告げ。只顧慈悲を求まば。師門縦ての往方とまうして素ゆくとも。
妻子を捨て。佛の道に入るべし。
いざ名告めひとらん。うるはしの松主うどの宮ひ難ぐさあめらぶ
いつぐもうぐ方ふ知らでとて。疑待日ふ孫増えれば実稚もゆ
安堵。やがて二うさ方人そひ居まうる。かくて卯花くちの
降くらと皐月の半ふ及ぶ。ある日師門い実稚のいと徒なうるを
えく。奥まうる仲ふ招くと。二人さ〜対ひて酒のまうべる言の序
ふ。師門勝ふまうる戸と低〜く。今の世ふ誠ふとまうるのいれ分の
外ふあらじと思ふ。そう程と告ふ。師門が伯父の呼領とりあづうる
ふ分と世ふ出さんとくのまうるふ。この方婦女子の法まうるかう松主

卯の夢尼　うのはなくとうあるあ　といや　いとさしく　ぬがふもや　のいとをきふ　うろ花さし　さくられど　雲雀の笑

和名抄に鼎名苑とも、剥只和名能太知知乃也　樵ぎるふ今いふ鑓どれし　のうぐひうう　和俗刃と云　とあるのにて　賜とうるもこと　金ふとこの文部ふ　誓ひをわ　誓ひをすると　一般彼金ふ　の古実未詳　今雑劇ふ　うるうるこの　ととうるもの

ふとこうふと実とくいくいをと憎をうるうるつ一つの願いを
うる。稱得さもすうぐ。ゆ分ぐ北歳ふうるとも結ど羽立ふもあも。呼領い委く
うへ〜ふ。いふ兼引すつぐきやとふ実稚ゆくかる庇ふあるふ。
呼領とうへ〜賜らんとうるぶ。ゆうる推辞ぐきうく仰ふくとうべ師門
いと嬉〜をるうるふく。ふく〜疑ふとふいあらねど。楚と表ふ誓と
ゆうくうとゆべうるとういひもとうらぐるふ実稚い短刀ふ著うるふ刀ふ
抜出〜。刀と刀と合〜くふるふ師門いいく訖びうぐ願い〜と
いふいゆ分ぐ妹薄雪のとえ近曽人のいつとゆけば成長ふ尽びく。戈色
うるとく比うる。花ふ譬月ふ方ふとも言竭〜がしとそいけいぐ妻と
娶らざれば頻ふ暮〜くふあるとど。今ふうく疎くうるとく過ゆくとうく。緩いひ
出るとも玉の方うるも諾うひうじとく黙止せふとそぐ。ひ絶る隙見

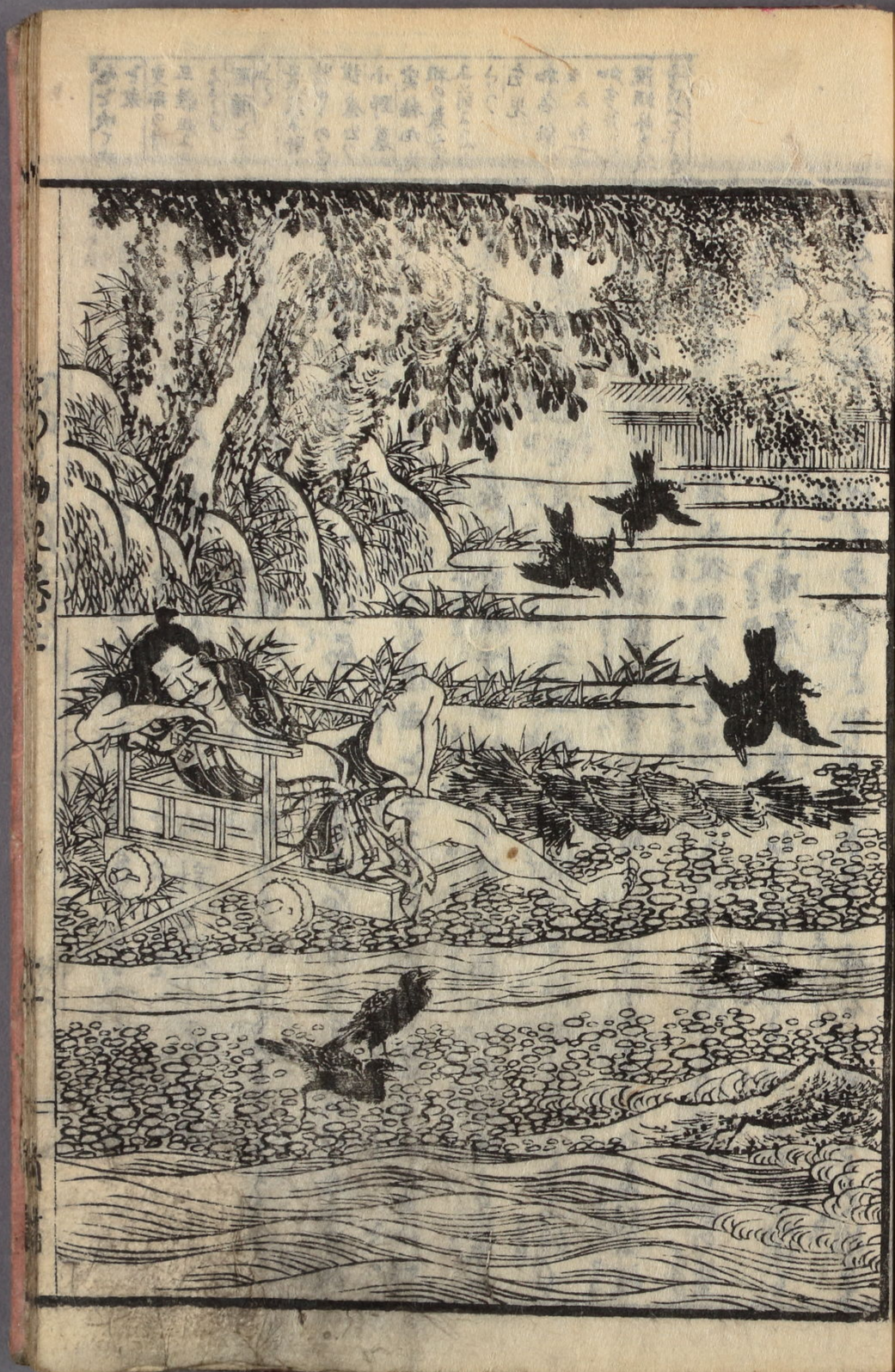
なるべくいとゝ心の苦しさを察しまゐらせ。爲ふ所の身も薄雪も從兄こまを乞ひ
婚縁を締びらく更ふ親ふ親とうるめるとそれいづ宿望らふ足もそ速ふ
隱居し。所領舊ふ因てうしをぶ。舍兄の威光のうゝ中薦めるんる。
るゆとうるどもそどこれ此身が意ふあらんとく。餘美ろくうのゝ中もれば。
実雅ういく少く頭を搔きるゆれ左右ふ托く推辭いあらねどもれふ
過あるび清水へ到ぐし。彼処へ吉くらぶれば。得べきうのとぐもあらじ
といふ師一點ふとくもれもこれ紙ふらざるふあらぐるるとく毎日ふ人を
出しく。密ふ松主ぐるれ少るふ彼今ふゆり上らぐといつ。あるれば
此身却く松主ふ捨られる体ふりくはゝゆ家ふうるくそのら
るれ謀るめ清曙しく松主うるまくらば。いうふ悔るもかひ
なるべし。とくといるびしふ立まび実雅少く。かまびられ又慰るうち

るし。さらび去るんとく。俄頃ふ行裝とし。その日の夕べまふいと疲労
まるるおりして。清水寺へうるれるるるるるの方も薄雪も実雅の只ひとり
うるるれるとるく且うまを且怪るるれ紙ふ少るふ間ふ
美垣い湯紙ふく足と洗せ進らせ孫十郎ぐ家ふ走りゆくるるれ
去らるまび孫十郎もるるるるるるるふ圓居し。
るるいるるしいふ文上の御往方い少定りるひるるる松主とるど
く俱しるるぐる。いとるるるとなしるるぐ。かるるるふ向もどざまる実雅い
あるるるるるるるるるひるるぐる。寺湿るるるるる。父の往方いいるるる
去るまぐ。いあるるる洛と出るるるるる。高野山ふるる登る。直ふ四國へ
赴く途るく。松主ふ捨らるまる路狼い彼ぐ懐ふまるればいるふるもまび
るく。辛ぐくるるるるるく。誠しるふ告ふるまび畏皆まる紙

四国
阿波上佐
伊藤濱岐
るまると四国
とふ

少く呆き果顔うち合しく居たるそぶ中ふ生垣いてぐ本意
なくそうぶ兄ふいあるとど。松主い丈夫ふ似げ色。いそぐ廿歳ふも乃び
まつぐる主君の供と賀しく。遠き国ふ赴きそうぐら。途ふ後まくく
ひとん、うへくうあらもるとやある。つぐ身り男子るらいかくいひびい
るさるれいせしくく。只顔ふうち腹くくく。孫十郎も又松主ぐ嘲とうを
ごらぬるの時薄雪いこの二人ふ数ひ。松主い利慾ふうぐひく主弧
捨ぐりのふあらぐこい全く途ふく舎兄の君弧ぐうしるひるは彼此と
索めぐるるらん。いく恨るとるれと宜つびあの方もこのり理
あり。るもさりふ実雅義るくくくるつば松主ぐ過いふうく
咎べらぐこくく。いと丁寧ふ諭すぐくく四五日ゆく。実雅いあの方ふ
ヤスゆう。普代恩顧の家隷もうんきるる主とうんうくう。あのぐ

栄利と謀るるふいうくぐうかくくあるぐ。終ふい餓ふ臨く父祖の名
とも恥りるん。つらく りひいぐうまふ師門い原一家の人ふ〜く。ふく
憎ぐくりのふあらぐ。妹薄雪とるの人るぐふ妻あるせらんあ。彼も又
るの信を感佩しく。呼領と返しく手んう。是仇ふ報ふ恩とりくもふ
謀るう。るかく実雅ぐゆ旨ふうち伺ひく。るの形勢とゆ絶じる
うといるる。るの方忽地氣色あ〜くるくくるるるるとる
理とも見ぐど。彼師門い人ふ婚まく不義の富とるるるのるうや
便うくるくくぐ女児と人の妻ふまりとも不義の家の妻ふ
るんるいるつもかるるふ再びいひも出ひるとるるく。つとるの縁
を立るぐ。実雅いまぐ〜目送うく合矣ひさくくいるぐ謀れぐ。
密ふ妹と奪ひまるく。師門ふ送らぐやとりひ〜がいるく彼人



實雅たのびく師門の家
ふかめむんと
る時三條
河原まで
来て暗ま
妓計を
好を
生く

毛と吹て疵と求　支那の常言五雑組ふえ
肝膽とく　素問ふ肝ハ将軍の官謀慮出ツ
小野墓　実雅九先祖の墓ふ番ふ前ふえさう
乞児　和名鈔ふ乞児ハ加多井迫田院垣外の徒今ものこじき

威勢とりく迫らるゝ世の少えと悼まるるべし。まろうとも此
吹く疵と求んい慮の浅きふ。ふたゝび姉計と施しく老学の移れも
まろうとぐうおりひえし。頻ふ肝膽を推くといんどもいまだきるべきこと
便と渡ど。あるうふおりひ屋しく。まるの此悟うをるべいうふ此
成ぐどらん。まぐ師門ふも情由を告くうとと尋思し。次の日ふ野
の墓へ詣るくく家と出潜ふ師門ぐ筭を赴けば四條縄くの木の
ふふ。蹇くる乞児破車の上ふ昼寝ろう。彼い鳥部野のわくふ行くる
のるるぐ毎月の會日ふ清水寺の門前ふ来くく。手指の老弱ふ銭
とを乞ふくく。実雅も彼野ふる乞児といくくまろう。又ふ樹の蘖
枝ふ烏六ッ七ッふくくと啼居るぐ。忽地むらだちふく川原のふんけく
とふふぐ死しく行るあるとと。しく男の屍石ふ堰ふくく流れも

あへめあり。実雅ふ両件のりの此ふくく。忽地謀と生じぐ。
路此ふくぐく師門ぐ筭ふ到く。潜ふ中ぐとあうといんせうとぐ。
師門ふの意と暁くぐくく。雨至ふ濡引しくく。ぐも既ふ定りぬ。
ふの時実雅声と低し。豫くく示さとし妹ぐるふ此強くドもること
いどども。継母頑ふくく一切兼引ど奪ぐくく進らるふ容易れ
どくくふ朝野の少えも影護し。さふふくく別ふ謀もあらん
うとふひうしくくとくふ引しも加茂川原ふくくふりのとくう。
ことふ就く謀あうくうふ利くる家隷一ふ人と借うへふの謀いあはぐん
箇様くうくくく額とつさ合しく。耳とうひしく密語へ師門ふくく
こうう毎ひくくふの計究ふい姉ふう。腹四の家隷河原柳只九郎兄筭の
りのふ命じくくふ此ふ。此ふ行いまぐうくくといふくうと行く。

合歓花
大木集ニ
ねむの花五六
月の間ニ
垣の
のぐるくに
もべしなど
ねむの花
和名抄ニ

実雅い直ニ師門ガ家ニ走リ出ル。ながらうもどきといふる潔ク
清水ハ立ちぬるの日ハ皐月晴ときらつく。ちぐさなる雨氣も
俄頃ニ暑堪ぐしかしふ日もや西山ニ傾くときふ蟬の諸声さいと
めづらしふ。ちくらふ。薄雪姫ハ門方ニ。がふの花さんとく。ひとり透
垣のもとに立在りひるふ。ありひもかけぞ。武家の走卒ふやあらん。
いとやつつと武夫のいくつ酔ぐるぶ。ちどり足踏ならしぬ門もとぐく
諸折戸さと押開きつ。ふるさと入きべ。薄雪いとるるげるうと
さくるるじく。物の蔭ニ走り躲きんとしるふと件の男楚と抱き
とる。さくも蟬妍なる未通女ぐるぶ。妻ふちん。誘うと戯もく。
嗅ときとをさし寄さんとく。ふるく濂髯揚つけるどもるふど苦と
叫びく振放さんとしるども。彼いぐぐう放つぐさいふ。黄縁く。枝

くるる楔花ニ。蛇の跂登るぐどくるもべ只鬼ニ神とられるるちく
しく。頻ニ人を呼びまんどもわしも端ちるるあるく。應もるりめぐるふ
るるるしふ。実雅つと走るるく。矢庭ニ彼男ガ肩夾とるる倶ニ足紙
揚く礫と蹴もべ忽地るるびしふ擅と仆ち。血さと流ぐ。眼と瞪歯
と切るく。殆死めぐるるるしべ。実雅も入るるるふるる撃ぐとる
引起しくるる結るふ。ちどしぐ絡ル應もせど。薄雪いるく胸るる
るるぐく。やふ。ぬ塀。やふくと呼びるるべるの方も。ま垣るるに走る
出。こんにのぐど。るく孫十郎と呼びくるるる。泣声ふるるく。ぐるるふ。
孫十郎も物の音とりあてやく。背門方ニ走るる。ぐどるる
るるぐく故と問ふ。義雅ぐまぐ縁故と告るべ。実雅もるれい只引返
んとるるるなふ。酔るるりのく常るるべ。彼足と住得ぐしるぐる

倒さうとすれども縛あんとすれども、その禍ともの〳〵ならず。親兄弟も
呆れびしたるも行とさんとく。只顧後悔を孫十郎少く〳〵悪ひ
まどろぎたるこの人〳〵酔ひる故ふ〳〵〳〵あるまで醒ならい甦生うん。
まづ水を汲くうえんびとく。口を押開く茎と銜し。顔へ水と吹けば
るびしくさすくふ勇つうう。まぐ〳〵あるく。彼男一声叫びく
服とえひらさるも動し足と溜り。まづふ身と起し〳〵左右と
えうう。又ふぐ衣服ふ鮮血の溜つ〳〵ふ撃ると猛ふ小腰
立るいしく腰刀をとらさるふうしつ。実雑と眼つけ。這奴ふぐ酔
とうとく。懐の物ふ目をあるい籠ふぐあるを向ふいく
酔うるびおも倒されう。今ふ一人も逃ほしというるいく走う
うらんとるふ腰うあ立ぐ。実雑吟笑く。逃れれ賊と罵れば。

賊どもうと
いうも彼ぐ人
の物と盗む
とうるうの
へうしふ分そ
逃まれいまぐ
まぐまやと
いうう
又或説ふ復
刺ハ発語ふ
ぐうるうん
るハ正まぐて
ともあるねと
てうぐうう
ハ
注連の内
こまこうう巳
うぐと塊と
うるいまうし
りうるう社地
うぐへまう
うの縄ひさ
まうるも巳
うるううハ
神垣ふまぐ
ム浄のうのと
ハまぐとそ
まうるうん

注連のうるハ門もぐと走へ入るく。
ふ彼ぐ人の注ひうう注連のうるハ門もぐと走へ入るく。
うぐ妹ふ調戯んとうぐ憎るまぐ。酔うるふやしく。只追遣らんとしと。
注連ふうう報轉く。れと恨えいるあるや。このうせもあるぐ彼男うるく
腹うるく。注既ふうぐ鳥柱と拓し影血と出しるぐう。るるいうがいうて
のるるるるる原い些の水とえんとくるる門うると注走う出く。むぎん
ふうう倒せうぐ。かくくいうう如しうぐしと罵うるうぐと孫十郎い危の時ふ
撃。ま垣い右の杖ふうるへさうく。さうるぐふ驚しうるやるハ彼男少し
氣色を和らげ。注ホう勸鮮と聽ざるふのあうねど彼若人が為体ふまう
ふ傍若無人くうるうらぐもうれ伏侮るうるれ。うぐ主君ハ威勢高く
うるるるるる這奴と結んとも又死さんとも。うぐ少えあぐる一言ふく。
仇と復もいと易し。まうるるぐも頻の使うるうけのうるく。あるうまう

実
雑
薄
雪
戯
人を
痛
姐
孫
彼ふ
勧鮮
王の
周章
三の丸

又人の家ふ
で薄塀よ
り出ゆゆも
ゆゆ往連
とりつく

醍醐寺の僧とく。飽まぐいひ懲し。やりやくふまあぐく。膳を拾腰弧
捺ま。薩さる足を引つ出さりまきびまの方いふうく実雑ふ教訓し。
小さのふかぐらひく。人と諍ひのりぐ。終ふ大望を悔つべし。彼者いろふ
狼藉ともいふ。ふうふるぐりもまそぐ落雷い女子の
ふふう。こまぐ故とりく。山牙ふ褐あらにん。母ごふふあらぞ。勉
を蔬忽ふる挙止きりひとと。愉しまぐ。実雑も悔却のふ氣色ふく。
ふの後とふく慎ひんとぐやふる。かくくふの日も既ふ暮ふく。ふぐ
甲夜の行ふるまぐ孫十郎いひふ門ふ立生く。涼ふ打しまぐ
ふうふふう坐行ふりのめふり。誰ととふまぐる幼野ふのる蹇
の乞児ふふ怪有ふる奴ふる。暮ふふ行ふのふく。漫行ふるぐと

向ハ乞児密ふふく。息ふ去ふ日ふ。ふふのふく。ふれふふの故い以前
つふふ。走卒とも。武夫ふぐ伏屋の向ふる。松の木蔭ふ倒ふく。苦痛
の声ふるく。ふ山ふ。ふふふふふふ。行くふの名と問ふふの人答ふ。
ふれ六波羅殿の内ふく。和連太九郎とふふりのふふ清水寺
ふ。醍醐ふぐの使とふけふふふ起くふるふ彼寺の塀内。ふふぐ
の家ふく。年紀十七八ぐふふる若人ふ打倒ふん。ふぐし昏絶くふ
ふふ。圖宅の男女の抱を得く。ふふふ甦生ふふき。ふふき
ども私の怨ふかぐふひく。主の使ふ後ふんいと不忠ふとふひ
ふふく。其処とぐ走ふ出。ふふふ到く頻ふ心痛し。更ふ生ぐふ
ふふふ。ふふ。ふふふふふふふふふふふふ。
ふど。ふふく患ふぐふふふふふふふふふふ。

つゝ癸処とおれくるたるべし。こゝをきりしゝの野の露と消るハ絵
六波羅ふまゝく。首尾審ふ少之あげ。こゝろふ讐と報ひ給ふ。
れハ下郎なをども。常ふ密事の使とうけまゐるのゝまゝ殿の
位ハもいと愛し。うゝらど影の寵ハ賜らんずといひとり。
忽然とゝく息絶ぬ供つらくいのふの清水寺ハ日ハ参ふ
命ハ繋ぎの地なをば家とし。恩恵と稟ざるもを。縦うらくる人
を罪なりとなもとの人ゝ尋ぬ活べきふもあらど。とく密ふの
人ふ去らせく。夜の中ふ屍を解らもとく。ゝまとりといふ。
孫十郎いとをハ少く。面色忽地土のごく。まじし回答も沈ぜず
しゝぶ。乞児微笑く。ふくる讐をきを。ひまひを。彼ふ尊ゝ若人も
又ハ身ごゝの人ふ由縁あるもく。ゝまとらくあまをばらを好意を

少えをあらさるるをとり。些の辛苦銭とのゝらば。人ふもまらきすゝ
ふをふ謀ゝをんといふ孫十郎且く尋思しく汝待。れ今談合
をゝを人あり。といひうけく背門方ふうら続ゝ。ゝの方親子の
隠宅ふをあらく。かるをあり。いゝふつゝまるべうりやといひも
あいざるふ。衆皆駭然とし驚き悲ひ口を開くりのるくしふ。
薄雪姫つくく少く。天と人とハ駭をくハ後ぐらをハ也ハいよく
罪ハうをめるゝ。縁故ハゝらハようハ起をば。人ハ殺ゝしハ落雷えと
名告歩んふも毋と兄とハ罪ゝらくをハあるべらぐをゝをば実稚
ゝハ左右ふ掉くハ身ハ女子のをこ縦をぐうら名告歩るとも誰
こをと実とせん。こハ全くゝぶるの也し過るをばゝれをぐうら折歩く
毋と妹と赦べくとふ其ハふ西日ふハ似ぐいと健氣ふをゝらをば

玉の方眼に涙を含み。さすがに父の子なれば。
名告りもあらで。潔さに似られども。親兄弟の悲しびとも。
〻。尚毋が。ありふるらば今宵こそ奔出て。逃るべくは道を。又脱ま
ばまいらのとさに親子ありともかうもあるべき。元来さ人は
殺さるるとの神も仏もまらせすぶべと宮ひく〻。又潸然と泣のべ
孫十郎がゃスゆう。仰さるるふいあまど。今宵こそ走うすふとも。
六波羅殿の威光の〻追捕らきんに逃ともいづ幽るべうに逃まき。
彼乞児に些の辛苦銭とらせ。密に屍を瘞く。火急の禍は
避のへかくともるに知りとるくに。田舎のどへうまんも遅ふあらじ
〻。只顧ふ薦るふどまの垣もいづまとはとるがべくひまど。
急るれば。孫十郎がゃ随ふまらせまんとこふまうまでも

大切の細謹
樵夫 ゝ云
大切の細謹を顧と大切
い小謹と無
せと謂ふ史
記ふ云云

玉の方も落雷姫もるは悲びまで孫十郎焦燥く。かくいひ
びひるく在〻ふうてび小野の家に奥〻まんるに大切へ
細謹とうるうどとやらんいまうあうまうでとひうう
ぐらく。あの家に走うゆるふ乞児いうの門方あのくうの回答と俟
苦銭いうくあうにうるくうに過分のうず
ふもあらぬ。ふ人のまらぬる間ふ。ふく屍を埋ふるといそじ立まべ
孫十郎黙〻く。ぐく乞児と前ふあるませ鳥部野ふ赴くいひ
つる松のあるまべ果〻く彼武夫死〻く夏州の中ふあう。この夜天結
陰くいと晴るまで。熟視まべ衣服の模様ぐも向ふ逢ねば。
聊も疑うぐ。ものうべ深く揺く遽〻く屍紙瘞ん。人ふのふ〻〻と

ゝろゝび路とゝろゝく直ゝ清水ゝ走りゝろゝゝ。ゝの方以下の人ゝゝゝの夜
ゝるゝ私語ゝりゝゝゝ。

別離の驟雨

夏夜ゝゝゝゝ短ゝゝゝゝ。次の日ゝ既ゝ未下刻ゝゝゝゝゝ乞児ゝゝゝゝ
孫十郎ゝ店ゝゝゝゝ。昨夜の辛苦銭と賜らんといふ孫十郎ゝゝ
いゝゝゝゝ得ゝゝゝゝゝゝゝゝ乞児ゝゝゝゝゝ。件の事ゝ六波羅へ訴ん
ゝゝ影の賞銭と賜ゝゝゝゝゝゝゝゝ

網代
魚を取る柵
うぢ宇治川上
氷魚とる網
氷魚の料理
式部丞山城国
近江国氷魚
網代各一所
氷魚の使大和
地蔵ふるさと

数のぶくろとび、そんまづうまこの臣といふ。乞児冷泉かぐろうのさい小児も実ふかどぞ。ろ伝いひ爪く悲きちんとちるともいくぐ一ぶて悲ぐ。ぐさ。ろぐ男足ことかろいねロい人ろ。ふ利のとろ。く可惜間費さんろうさらべ六波羅へわるぐしといひとろ。外面へ坐ろ歩ふ。彼市人とわくとふとぐら。又孫十郎ふ数く。緑故と細しふきちねども大急なる難笑ふの料理式部丞山城国近江国氷魚網代各一所氷魚の使大和地蔵ふるさと

こんんんろうぐ男ぶろふ宇治川ふ網代しく。氷魚と捕く洛へ上し。又常ふ治の織物ふ買ろく。西国へ賣ろ。ふ治業とする。兵四郎とりふりのん。ふも浪行ふれの織物ふ買んとく。懐ひ。ふれ。金一裏ある。とぐ性ひしく。ふの難笑とろるふ忍ぶそふ。ふ借ぐさふ。ふ口舌とちはしろんわあひしろふ百両ぐとまく足やろふ足らどやろく数とろく受ぶとろんといひ。賊布の裏ろうやふとふ孫十郎

蛾の甚堂ある
堤崩れとく
枕朴子ふ百
尋之室燒於
分寸之廳不
丈之坡潰於
一蛾之穴
繦緞
続漢書注
ふ繦ハ黒索
とくくろき
ろいく紐ハ
赤ろうもく
ろけろく紙
いふいふ
黒索とろて
罪人を拘ハ
赤ろ〜とん

いふふぐ取ろを好意ハ欲しいきど。ぐんんいろいん。ふ一面の変もるきくのふろう。影の人ふ紙借得ぐき謂ひとく推辭と兵四郎ろそねく。いるられもれ身ふ頼ぶ。ぐさとろあり。常言ふ天の授ろとろられぐ却く禍ろといふ。ぐろ惑ふて悔ろふ。とりふもあろけく孫十郎いるふ見東ろくいあ見どりとの金ふ午ぐしく。乞児ぐ祈歩んふ蛾の墓ふり堤崩れとく忽地ふ繦緞の患ふられ〜ぐ思〜。彼金ふ取く数回押戴きとい誠ふ再生の庇ろく。ぐふ紙ぐく。ぐんぐしが恩借いきぐしく。ろく飲び歩ぐ件の金と乞児ふとらせ紙ろのはとろくも罵ろやとろんぐ乞児い金と得く。ぐ。ぐ。ぐ

乞児孫十郎が
宿れまて十年目
綾をすもも貴人
兵四郎らの
の熱気を
ちらひく
落雪を
伴ひ人と
玉の方
愁歎

色い
踊は
去
雪い
雪も
雪
糸餅

姪　余雅ふ子の妻を婦とふ和名与女

妻　和名鈔ふ云文字集略ふ云ふ和名乎無ふ女正婦ふ故ふ故ふ故

行ることなりぬ兵四郎もうじく。いろぐ児の病危きをおかく緩やうのるる
あめらず。こは一分ゆ身が火急と救つ。れ身も又ぐ火急に救人とるる
べるどう一言の媒と厭まうん。とく〳〵應に少せすてとじく志じも
ぐ〳〵と氣色のれば孫十郎脱ろふ〳〵。つて苦しきわ〳〵も表切
背門ふむく孫十郎に出ぬ且く密語く走てゆけば孫十郎い舊の如
ふ到〳〵。兵四郎ふ對ひ宮ふ呼理之緣由と彼人ふやべりそば行せのいとひ
うく〳〵つと背門方ふ走り去る。面の方のわとうふるる。面の方も落雷の
も頻ふ涙はじぐみ。実雅もふ又さ抱らじき氣色くるの時まの方い
孫十郎が来るに成ぬ。とるじく涙撫ぬ宮ふやう往ふ後が店前ふ物の
息〳〵ゆゆが石雷れば落ふ出ぬ。ふ遣〳〵く少せるふ児が腹
あ〳〵く。影の今に微かしと〳〵。商人ぐ思に成ぬ〳〵病まるとれく

ゆうんとりふとまく首尾とまらせうがさく〳〵ぐ俄頃ふ召るとい涙
ひとうが喉ふもあらどうのあふ過世の悪業ろるべれば身と捨て
彼処へゆうんとく落雷が請ぬ。ふ実雅が爭ひぐ〳〵く。
ろう果べうもあらどされど母が処りくうてきい実雅い家と嗣ぐ〳〵て。
はさらいが生るふあられば継母の悪さまく〳〵。ろの子の罪せろ〳〵ぬ〳〵。
ふ殺ぐ〳〵しるどぐろまんへいと杖と〳〵。加藤この子ふ楯ぬ〳〵せく〳〵い殺ふ
對〳〵くいひ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ぬ。これがとく今の身ゆう〳〵百枚といふ黄金の
頻ふ出すべきうとぐもあらねば。いづ色ひとうい捨ぐじく外ふ出さぬやう
もあらねど世とく〳〵晴とく涙はじゃ小野少将秋光朝臣の女児とい生れ
ぐも数ふもあらぬ今ゆるふ賤さうの妻とるうさがりぬる痛〳〵き
る殿ふさうんうもも又〳〵あ〳〵れと構らぬふ〳〵ふ命運微くてくる

丹波の人
氷上の君
其外國部
古事記抜萃

憂ふあふとぶと口説くく泣くうへ薄雪堆もるまと泣妻上いくるる難き
ひとをねじ父の子とう生まれくも物の用ふ法ざるかひろのこと恨こ行う
しふ親と兄との禍ふかりくひとう捨る身とぞ行う惜くばくき者彼
ふ身沈賣くくうき河竹の流ふもくう。例もあまこあるうの流死別する
ゆもあらぬ。只世と宇治の川浪ふ。まじ波むともゆく水の又還會時
もありうん。とうひ帰とも。いつふいうれぬるの人ふ面るくも痕嘘し
ふ涙とひうけく轉輾まんぶ。ふの方ひうう悲歎ふ堪うとを遠慮と
宮ふ。丹波の人あく行ぶ。いめる夜深くくるの人ふ垣ふ語りうひ
をう〜ゆまうくいあうぬるとと序るうれが問もせざいひ出もせねどうき
人ふ添ふし締びめと約びしも。おりいふ夢ふくあうくるる羽立ふもあ涙
氷上ふう。信あらば行というん。後のふひふいとぶ今の別のいと惜とて果

しふさまくかとうるうばう薄雪いや頭と擡ふ垣と顔とえあひてさそい
その夜の物ごうと。まひし食てやうつるるもいひ難く又隠口のくぐうう
しけあとくえすふまの垣も瞼うき拂ひ悔くうりぬとふしあまど兄松主
ぶまうあう。氷上の君ふう音耗あらばいひ寛るまずもあうんふ。まぶ
しも行ぬるの人の幻の中もうぶうぬ。猛虎の尾と蹈く毒蛇の口ふひふ
といふ。警ふも渡すうぶる。憂ふうえくくうるべき身ふしあうぬぶ流ふ
さ。ふも行とはんくく泣ふくう。日ふあい男にしき女子ふれどもるふ迫う
くいふのうくく。涙ふ物というもくるも哀まえ孫十郎いうの時ぶくも
頭と低く居くうしぶ。數回嘆息し。朽とくくるかるせふあうせるると
くくふ僕ぶ惠の涙さふ起くく罪といひとくふ言葉ぶまういあまと
松主どのうう預くくる姫君と。市人の妻と思まうまぶくふ。所詮

彼乞児と追留て。今こゝの舊へ立直ふ母子の所供養〳〵。命の限り落
ゆく〳〵孫十郎が内の用意と思ひのこらひもあつど既ふ走り
出んとすると。薄雪姫こゝろく〳〵と諫かく始終差るくい誰うふ知と苦
しみ。こゝろ〳〵じめ方〳〵ぐ法を犯し。後ふ知て屍を埋さる悪報ふ脱れ果ずも
ゆくさきこれふ知と定るこゝろ。くるめ人ふ行べきと回答ふと宣へば。
孫十郎ふ當家の理ふ推辞かく〳〵肢體も癱く撞と出し只顧こゝ身と恨
るのこゝ更ふ出んもこゝろ。商人兵四郎ふ孫十郎が回答と行こゝ彼が跡
ふ〳〵く背門方ふ出。則ふり生垣のあるこゝ〳〵もるく立出し。只今
降雪のゆく〳〵と宣へゆく。竊ふ歌びやとら諸わこ押飛さつ〳〵さ〳〵
歌こゝ。日もこゝ南こゝ。ゆくべふ誘こゝ扛せる轎もあるべ路の縋ふ易し。
天も又雨氣つきぬこゝ〳〵と降門が降雪こゝ〳〵と宣ふこゝふ兵四郎

こゝ〳〵あげく逸ふ指けば。二人の轎夫も又背門こゝ〳〵ふ続こゝ庭ふ轎と扛ふ。
こゝふ出しこゝ。ふの方ふ障子の透こゝ〳〵この景遊ふこゝ〳〵と飲
こゝ法こゝふ薄雪ふ物こゝ〳〵こゝ〳〵こゝ〳〵

假商人兵四郎
怒地五十人の賊
兵四郎まを混
の中へ投
薄雪と奪
薄雪と奪

苦集滅道　下学集に云洛陽東山清水寺の前清水寺の橋と三井の開山泰澄和尚城陽山崎の別業に往んと欲せ此地と逕ろに及くその木履の響鳴で苦集滅道の音とるとこそ故に苦集滅道といふ

短冊に歌の袋に秘をけり。とと内外に進らせ。父とも母とも涙を流すとて涙を流すく遍手しまへに押戴く懐に。実雅にも別と告孫十郎にも母上のなごり叫嘆みこの心ゆえ障子角にせく出すに。兵四郎に信に勇て慰くに轎に扶ませ既よ樓出さんとするに孫十郎に宇治までに送らせ。いたしく草鞋穿あらく。轎の後方に引副さう。実雅にじめう。手濡うく行るもいにざりしに。つと立あがくられ故妹に憂をとうんとくりうとも立あれば。まの垣に樓門のもとうまで。送り出く別離と悲しび。あの方に衣引うつくその後彼処に手郎にまでに五四郎に只顔轎に。いとぶしく苦集滅道に打しも皐月下旬の天定なくく夕暮近く黒ぐらに一驟雨のさこ降まくいとぐ濡る細道と簑に笠にと罵あいく直に走。挑んとまるとさ兵四郎杖とくく実雅の向殿を拂ひ忽地撲地と孫十郎

墨ぐら　五月雨の一時くらくらくらく黒ぐらくらくらく

其衣裳を被せ月の暗きを欺謀すべく。孫十郎を埋させると。又商人兵四郎と稱て孫十郎を今と偽し強て落雪と云ふ。しかるに只九郎をば。二人の轎夫も師門の奴隷と。この只九郎。苦集滅道をば実雑と打倒せし。孫十郎を彼と疑ひ。遂くいひあはしてこれを師門にて謀計く落雪と奪とりこの後乞児とも密に殺さしく。件の今流れを復し。さべく縁故と世の人をもまどはせと。淫楽を接ぶせんと計較めり。然るに文永三年の春美女財宝を劫掠し。兇悪を逞せ。賊主榎嶋夜叉太郎。其頃六波羅の追捕を道を此の支黨とわく。近江の山中に躲居らしに近曽落雪姫の容止世に比なきを伺ひ。第一の支黨小殿荒平太ふ小賊五六人をとし副く。其住家を窺せるに小殿とこの日のとぶまり中途に待伏し。輙く薄雪を奪去ぬ。